

〈テーマ〉

### 近代家庭教育論再考

―ペスタロッチー・フレーベル・モンテッソーリから何を読みとるか―

司 会 文教女子大学 岩 崎 次 男  
愛知淑徳大学 江 藤 恭 二

提案者

鈴 木 由美子（広島大学）

ペスタロッチーの家庭教育論についての提案をさせていただきたい。神戸での小学生連続殺傷事件や、その後に起きたナイフでの担任教師殺害事件などの凶悪な少年犯罪をはじめとする子どもたちの荒れの問題は、一方で中央教育審議会による心の教育に関する議論を、他方で、少年法改正論議を巻き起こしている。子どもたちの心の教育の重要性について審議された中央教育審議会「幼児期からの心の教育の在り方について」の答申「新しい時代を拓く心を育てるために～次世代を育てる心を失う危機～」(1998年6月30日)は、家庭教育に約3分の1の分量をさくとともに、内容的にもかなりふみこんだ提言をしている。しかしその内容を見ると、そこには人間とは何か、人間にとって家庭とは何かといった本質的な議論が欠落しているように思われる。この点に対し、ペスタロッチーの家庭教育論は何を提起することができるのか、以下提案していくことにしたい。

まず原理的視点から、家庭教育の意義を、人間存在の原点としての家庭、社会改革の原点としての家庭、教育的意義からみた家庭の3点について述べたいと思う。『隠者の夕暮』のなかの一筋に、「満足している乳飲み子は、この道において、母親が自分にとって何であるかを知っている。しかも母親は、乳児が義務とか感謝とかいうことばを口にできないうちに、感謝の本質たる愛を乳飲み子のうちに形作る。そして父親の与えるパンを食べ、父親とともにいりばたで身を暖める子どもは、この自然の道において子どもとしての義務のうちに自分の生涯の幸福をみつける」ということばがある。これは、家庭に対するペスタロッチーの見解の端的な表現である。ペスタロッチーは人間を善への強い

意志を持つと同時に悪への傾向性をもあわせもつ中間的存在としてとらえている。人間に特徴的なことは、動物的と思える行為のなかに、精神的本性の萌芽を含んでいるところである。この特徴は、家庭生活のなかでもっともよく現れる。このことは、家庭が人間が人間であることを受け入れる場所、いわば人間存在の原点であることを示しているといえる。

しかしペスタロッチーにとって、家庭は個人としての人間が憩う場所にとどまらない。ペスタロッチーにとって家庭は、社会改革の原点でもある。18世紀から19世紀にかけてのスイスは、二重革命の時代だった。産業革命と市民革命の嵐が吹き荒れていた。当然それは、政治体制の改革へと向かう。そうした中でペスタロッチーは、人間教育の必要性に着目した。政治体制ではなく人間教育に向かったのは、たとえ政治的枠組みがかわっても、人間が変わらなければ政治革命はなし得ないと考えたからである。政治においても人間が中心であり、その人間を育むのは家庭である。その意味で、家庭が社会改革の原点であるといえる。

しかしもっとも重要なことは、家庭の教育的意義である。この点について、以下3点において提案したい。

まず第1に、愛情ある結合の形成である。この点でペスタロッチーは母親の力を高く評価した。彼によれば、「母親は子どもを養育し、守り、喜ばせずにはいられない。…子どもはめんどろをみてもらい、喜ばせてもらう。こうして子どもの心のなかに、愛の萌芽が成長してくる」。ペスタロッチーにとって愛情こそ人間が人間であることを示す唯一の証左であった。ペスタロッチーはこの点で、両者の愛情ある結合を高く評価した。

さらに重要なことは、基本的信頼感の育成である。「今まで見たこともない対象が目の前に現れると、子どもはびっくりし、こわがって泣き出す。母親は子どもを胸にしっかりだきしめ、あやしてやり、気をまぎらわせてやって泣きやませる。…子どもは母親のほほえみに、明るい澄みきった目で応える。こうして信頼の萌芽が子どもの心のなかに育ってくる」。母親への基本的信頼感から子どもは次第に信頼の対象を広げていく。最初の信頼関係が何よりも重要なのである。

このような愛情ある結合や基本的信頼感は、最終的には子どもの自律へと向かう。ペスタロッチーは、「子どもを母親と強く結びつけているきずなが、どんなに不可侵のものであっても切れるときが来るに違いない」ということを常に意識している。自律へのワンステップは、家庭で母親や父親によって与えられる庇護感のもとで育まれていく。

もちろんこの他にも、労働と学習の結合、家庭での道徳・宗教教育等、重要な提言をペスタロッチーはしている。しかし原点として、他にかかわることのできない部分としてみたとき、以上の3点が示されるのではないかと考える。

では、こうした原理的視点をもつペスタロッチーの家庭教育論から私たちは何を読みとることができるだろうか。ここでは以下3点を提案したいと思う。

まず第1に、根底にある人間観、いいかえると両面的人間理解をあげたい。ルソーは人間の根源的善性を示すことで、18世紀以降の教育観を決定的に変えた。ルソーに続くペスタロッチーの課題は、「ルソーが分離したものを結合すること」にあった。それは「自由も善であるが従順も善である」ということである。たしかに子どもは根源的に善を求める存在であるが、それと同時に、悪への誘惑にさらされやすい弱さをもっている。悪へと陥りやすい人間の弱さを認めた上で、なおそれでも真理や正義を求める純粋な感覚を信じ、それに働きかけること、これが家庭教育において最も重要なことだといえる。昨今の少年事件をみると、人間が根源的に善であるということだけでは解決しえない点があるように思われる。人間の弱さと強さに対するリアルな認識と、弱さに打ち勝つ克己力の育成が求められる。

第2点は、母親の重視である。ペスタロッチーは、「子どもの最初の授業は、頭脳の仕事ではなく理性の仕事でもない、それはまったく感性の仕事であり、心情の仕事であり、母の仕事である」と考えた。女性の妊娠・出産は人間の手でコントロールできない部分を含んでいる。最近は生殖技術が進んできたが、それでもなお生命の誕生は人間の手では及ばないところにある。母親が妊娠し出産することは、こうした人間の手におよばないことがらを体験することでもある。自然や人間の力を超えたものに対する畏敬の念とでもいえるだろうか。そうした感情、感性をもつ存在として母親を重視したように思う。

また、歴史的にみると、ペスタロッチーの時代は近代的個別家族の形成期にあたる。したがってペスタロッチーが母親を中心とした個別家族に焦点をあてたのも、時代的な影響によるものととらえることができる。ただペスタロッチーに注目すべきなのは、彼が中産階層だけでなくまた、労働者階層の家族にも目を向けていたという点である。時代に対するこうした複眼的な見方は、母性愛重視が現実的にもつ矛盾を見通している。ペスタロッチーが生きた当時のスイスは、家庭の収縮の時代とよばれた時代で、核家族の方向へと変動していた。婦人の家庭外労働も増加しつつあった。そこで彼は、キンダーハウス構想と母親教育とを同時に提案することになる。これらは子どもの発達権、あるいは子どもが暖かい家庭で過ごす権利の保障を先取りしたものであるといえる。

子どもの権利条約をサポートするある団体（Save the Children Japan）は、条約の精神として「子どもは暖かい家庭の中で」をあげているが、これはペスタロッチーの家庭教育論と通じるところがあるといえる。母親に抱かれているような暖かさ、庇護感をとりもどすことが必要なのである。このためにまず、母親が子どもを暖かく抱くことのできる環境を整備することからはじめなければならない。だからといって「母親よ家庭に還れ」というわけではない。女性の社会進出が進行する今日においては、女性の自律と子どもの教育とが矛盾しないような形になる方策を是非とも創り上げる必要がある。母親のもつ暖かな庇護感を子どもたちに与えるために、安心して母親が子どもを育てることができ環境を整える必要があるといえよう。

第3点は再興の論理、あるいは回復の論理である。母親教育を例にすると、ペスタロッチーは人間存在の原点として、社会改革の原点として家庭を重視したが、なかでも特に母親のもつ教育力に着目した。けれども時代は母親が母親として生きることを妨げる状況にあった。そうした中でペスタロッチーはどうしたか。ひとつには家庭に代わる施設としてキンダーハウスを構想した。しかしもっと重要なことは、どんなに母親が墮落していようとも、母親が必要であるならば、母親のもつ教育力を再興しよう、あるいは回復しようとしたことである。

家庭の再興、回復のためには、個人が意識を変えることだけでなくまた、社

会そのものの価値観を変えていく必要がある。中教審がいうような暖かい家庭を実現するためには、両親が一定の時間に仕事を終えて帰宅し、家庭にいる時間を充分とれるような政策的視点が必要である。形だけの提案では変革にはならないのである。経済優先、効率性優先の社会では、無駄の多い、不合理なことの多い家庭教育は犠牲にならざるをえない。人間中心の、人間優先の社会を創り上げることが求められるといえる。ペスタロッチーにとってはその変革の主体もまた、家庭の個々人であってけっして政治家ではない。個人が強く再興、回復への意志をもって社会へとかかわっていくこと、その意義をペスタロッチーから読みとることができる。

ペスタロッチーの家庭教育論は、理念を実現するためには、それが本質的に重要なものであるなら、再興していくこと、回復していくことの大切さを示しているといえる。この再興の論理、回復の論理こそ私たちが学ばねばならない点であるように思う。